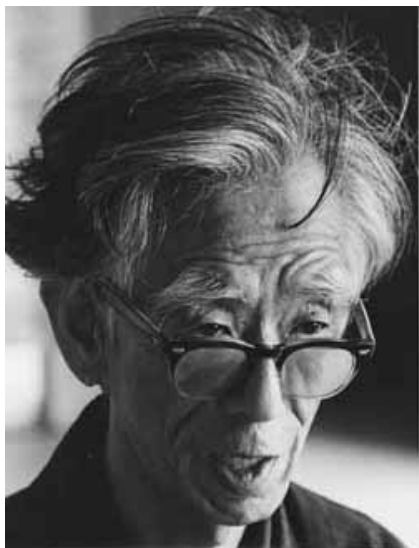


## 澄んだ水滴になる

渡邊正己

京都大学名誉教授

(msn@rbnet.jp)



「私は人というものが何より大切だと思っている。私達の国というのは、この人という水滴を集めた水槽のようなもので、水は絶えず流れ入り流れ出ている。これが国の本体といえる。ここに澄んだ水が流れ込めば、水槽の水は段々と澄み、濁った水が流れ込めば、全体が段々に濁ってゆく」。この文章は、日本を代表する数学者 岡潔<sup>注1</sup> 奈良女子大学名誉教授がその著書「春風夏雨」に書かれた短編「六十年後の日本」の冒頭です。彼は、戦後二十年を経た昭和四十年代に日本という水槽に流れ込む水滴（ひと）が次第に濁ってきており、六十年後に

は、水槽が大いに濁ってしまつて日本が破滅するのではないかと心配されたのです。彼が示した六十年後まで十年を残すいま、我が国は、毎日のように理由が判らない殺人のニュースが流れ、非正規社員率が四十%を越え若者の間に予想できないような貧困が広がり「勝ち組、負け組」という言葉で象徴されるような格差社会への道をまっしぐらに進んでいます。そんな状況でありながら、国のリーダー達は、「経済の活性化が日本を豊かにする」という何十年來の主張を繰り返しているに過ぎず、益々、水槽が濁ってしまつていくのは避けられません。この五十年近く、日本で生まれ育つた私達が綺麗な水滴になることができず水槽を濁らせてしまい、なんとかしなければ取り返しがつかない状況にあるのは間違いないようです。

この状況を乗り越えるためには、綺麗な水滴が水槽に流れ込むことが重要で、美しいひとが育つことが大切なのです。どのようなひとを育てれば、水槽の水を綺麗にできるかが問題ですが、そのためには、哲学の永遠の命題である「私はだれ？」を実践し自分を知らねばなりません。そして、自分を知るためには、自分以外にひとがいるということ認識する能力が大変重要となります。

この夏、娘が生まれたばかりと五歳の二人の孫をつれて帰省してきました。二人の孫と遊ぶと実に楽しく、一日があつという間に過ぎますが、彼らの行動から実にいろいろなことを学びます。生まれたばかりの方の孫は、お腹がすけば泣いて母親を呼びお腹を満たし、おむつが不快になればまた泣きます。恐らく、彼女にとつ

て、世界の中心は自分であつて自分の意識のなかに自分しか存在していないと思えます。彼女は、自分の周囲の出来事を「熱い、痛い……」と動物に基本的に備わっている「感覚」（すなわち五感）だけで感じているようです。といっても、彼女は、私に向かつて「にこっ」と笑つてくれるので、私だけに好意を持つて認識してくれているのかと嬉しくなりますが、動物学者にいわせれば、ひとの赤ん坊は、自分に関心を向けてもらうために笑い顔を作るのだということですから。ほかの動物の赤ん坊が「にこっ」と笑うことはありません。

一方、五歳になつた孫は、最近、知らないことを知りたいという要求が大変強くなつていて、一日中「どうして？ どうして？」と質問攻めにします。そして、教わつたことを吸い取り紙にしみ込むインクのように吸収し、多くの知識を身につけていく様子には、目を細めずにはおられません。彼は時々、私が思いもつかないような話しを始めるのですが、よく聞いてみると、これまでに得た知識を組み立てて、自分の知らないことを想像して話していることが判ります。勿論、彼自身には、現実と空想の区別がついていません。このようにして、自分の周りの事象を感じる力は、「知性」と呼ばれ、私は、彼が知性を備えた若者に成長してくれることを期待しています。

さらに、自分の周りに自分とは違うひとがたくさんいて、友達と楽しく遊べたときは、友達も楽しいけれど、意地悪をされた友達は、怒ったり、悲しんだりするということに気付き始めているようです。このことは、彼が、他のひと

にも「悲しいとか嬉しい」という感情があることを「こころ」で理解するようになったことを意味します。岡先生は、この認知の仕方を「情緒」と呼ばれました。「情緒」による認知は、「感覚」で認知すること違って、姿や形があるものではなく自分の「こころ」の中に沸き出すように生まれるものです。大自然の美しさに言葉を失って感動するということも同じです。ひとがけものから人間になるというのは、とりもなおさず、この他人の感情や自然の美しさが判るようになるということです。彼は、少しずつひとに近づいているということなのでしょう。

このように人には、「感覚」、「知性」、そして「情緒」という三つの認知の仕方が備わっています。これらの知覚のなかで一番働きやすいのは、「感覚」であり、次に「知性」、そして、最も働きにくいのは「情緒」です。従って、ひとは、努力し自分を磨かないと易きに走り、「感覚」だけで物事を認識するようになります。そうになると、五感で認知できる形あるもの存在は、判るけれども、他人の感情や大自然の美しさを「こころ」で理解できなくなり、目に見え、手に触れる物質だけに固執する物質主義になってしまいます。「知性」が働くためには、多くの知識と経験を身につける必要があります。教育が大きな役割を果たします。そして、「情緒」は、美しい水槽のなかでないと育むことはできません。いまの水槽が濁り続けている最大の理由は、日本の社会が経済的価値観一辺倒でつくられており、ひとのひとたる由縁の「こころ」がないがしろにされているからでは

ないでしょうか？日本が澄んだ国になるために、こころの精進をして、澄んだ水滴になろうではありませんか。

注1 岡潔…日本を代表する数学者。岡潔（一九〇一—一九七一）、多変数解析函数を研究し世界をリードした日本の数学者。元奈良女子大学名誉教授。理学博士。和歌山県伊都郡紀見村出身で粉河中学を経て第三高等学校、京都大学に学ぶ。湯川秀樹、朝永振一郎、広中平祐氏らに影響を与える。春風夏雨、毎日新聞社、昭和四十年六月三十日第一刷発行。